軒もる月

樋口一葉

青空文庫

我が良人は今宵も歸りのおそくおはしますよ、我が子は早く睡りしに歸らせ給はゞ興なくや思さん、大路の霜に月氷りて踏む足いかに冷たからん、炬燵の火もいとよし、酒もあたゝめんばかりなるを、時は今何時にか、あれ、空に聞ゆるは上野の鐘ならん、二つ三つ四つ、八時か、否、九時になりけり、さても遲くおはします事かな、いつも九時のかねは膳の上にて聞き給ふを、それよ今宵よりは一時づゝの仕事を延ばして此子が爲の收入を多くせんと仰せられしなりき、火氣の滿たる室にて顎やいたからん、振あぐる槌に手首や痛からん。

女は破れ窓の障子を開きて外面を見わたせば、向ひの軒ばに月のぼりて、此處にさし入る影はいと白く、霜や添ひき來し身内もふるへて、寒氣は肌に針さすやうなるを、しばし何事も打わすれたる如く眺め入りて、ほと長くつく息月かげに煙をゑがきぬ。

櫻町の殿は最早寢處に入り給ひし頃か、さらずば燈火のもとに書物をや披き給ふ、然らずば机の上に紙を展べて靜かに筆をや動かし給ふ、書かせ給ふは何ならん、何事かの御打合せを御朋友の許へか、さらずば御母上の御機嫌うかゞひの御狀か、さらずば御胸にうかぶ妄想のすて處、詩か歌か、さらずば、さらずば、我が方に賜はらんとて甲斐なき御玉章に勿躰なき筆をや染め給ふ。

幾度幾通の御文を拜見だにせぬ我れいかばかり憎しと思召すらん、拜さば此胸寸斷になりて常の決心の消えうせん覺束なさ、ゆるし給へ我れはいかばかり憎きものに思召されて物知らぬ

女子とさげすみ給ふも厭はじ、我れは斯る果敢なき運を持ちて此世に生れたるなれば、殿が憎しみに逢ふべきほどの果敢なき運を持ちて此世に生れたるなれば、ゆるし給へ不貞の女子に計はせ給ふな、殿。

　卑賤にそだちたる我身なれば初めより此上を見も知らで、世間は裏屋に限れるものと定め、我家のほかに天地のなしと思はゞ、はかなき思ひに胸も燃えじを、暫時がほども交りし社會は夢に天上に遊べると同じく、今さらに思ひやるも程とほし、身は櫻町家に一年幾度の出替り、小間使といへば人らしけれど御寵愛には犬猫も御膝をけがすものぞかし。

　言はゞ我が良人をはづかしむるやうなれど、そも〳〵御暇を賜はりて家に歸りし時、聟と定まりしは職工にて工場がよひする人と聞きし時、勿躰なき比較なれど我れは殿の御地位を思ひ合せて、天女が羽衣を失ひたる心地もしたりき。

　よしや此縁を厭ひたりとも野末の草花は書院の花瓶にさゝれんものか、恩愛ふかき親に苦を増させて我れは同じき地上に彷徨はん身の取あやまちても天上は叶ひがたし、若し叶ひたりとも※は邪道にて正當の人の目よりはいかに汚らはしく淺ましき身とおとされぬべき、我れはさても、殿をば浮世に讒らせ參らせん事くち惜し、御覽ぜよ奥方の御目には我れを憎しみ殿をば嘲りの色の浮かび給ひしを。

　女子の太息に胸の雲を消して、月もる窓を引たつれば、音に目ざめて泣出づる稚兒を、あはれ可愛しいかなる夢を見つる乳まゐらせんと懐あくれば笑みてさぐるも憎からず、勿躰なや此

の子といふ可愛きもあり、此子が爲我が爲不自由あらせじ憂き事のなかれ、少しは餘裕もあれかしとて朝は人より早く起き、夜は此通り更けての霜に寒さを堪へて、袖よ今の苦勞はつらくとも暫時の辛抱ぞしのべかし、やがて伍長の肩書も持たば、鍛工場の取締りとも言はれなば、家は今少し廣く小女の走り使ひを置きて、其かよわき身に水は汲まさじ、我れを腑甲斐なしと思ふな、腕には職あり身の健かなるに、いつまで斯くてはあらぬものをと口癖に仰せらるゝは、何處やら我が心の顏に出でゝ卑しむ色の見えけるにや、恐ろしや此大恩の良人に然る心を持ちて苟にも其色の顯はれもせば。

父の一昨年うせたる時も、母の去年うせたる時も、心からの介抱に夜も帶を解き給はず、咳き入るとては脊を撫で、寢がへるとては抱起しつ、三月にあまる看病を人手にかけじと思召しの嬉しさ、それのみにても我れは生涯大事にかけねばなるまじき人に不足らしき素振のありしか、我れは知らねど然もあらば何とせん、果敢なき樓閣を空中に描く時、うるさしや我名の呼聲、袖、何せよ彼せよの言附に消されて、思ひこゝに絶ゆれば恨をあたりに寄せもやしたる、勿躰なき罪は我が心よりなれど 櫻町の殿といふ面かげなくば胸の鏡に映るものもあらじ、罪は我身か、殿か、殿だになくば我が心は靜かなるべきか、否、かゝる事は思ふまじ、呪咀の詞となりて忌むべきものを。

母が心の何方に走れりとも知らで、乳に飽きれば乳房に顏を寄せたるまゝ思ふ事なく寢入し兒の、頰は薄絹の紅さしたるやうにて、何事を語らんとや折々曲ぐる口元の愛らしさ、肥えた

る腮の二重なるなど、斯る人さへある身にて我れは二心を持ちて濟むべきや、ゆめさら二心は持たぬまでも我が良人を不足に思ひて濟むべきや、はかなし、はかなし、櫻町の名を忘れぬ限り我れは二心の不貞の女子なり。

兒を靜かに寢床に移して女子はやをら立上りぬ、眼ざし定まりて口元かたく結びたるまゝ、疊の破れに足を取られず、心ざすは何物ぞ葛籠の底に藏めたりける一二枚の衣を打返して淺黄縮緬の帶揚のうちより、五通六通、數ふれば十二通の文を出して元の座へ戻れば、燈のかげ少し暗きを捻ぢ出す手もとに見ゆるは殿の名、よし慝名なりとも此眼に感じは變るまじ、今日迄封じを解かざりしは我れながら心強しと誇りたる淺はかさよ、胸のなやみに射る矢のおそろしく、思へば卑怯の振舞なりし、身の行ひは清くもあれ心の腐りの棄難くば同じ不貞の身なりけるを、卒さらば心試しに拜し參らせん、殿も我心を見給へ、我が良人も御覽ぜよ。神もおはしまさば我家の檐に止まりて御覽ぜよ、佛もあらば我が此手元に近よりても御覽ぜよ、我が心は清めるか濁れるか。

封じ目ときて取出せば一尋あまりに筆のあやもなく、有難き事の數々、辱なき事の山々、思ふ、戀ふ、忘れがたし、血の涙、胸の炎、此等の文字を縱橫に散らして、文字はやがて耳の側に恐ろしき聲もて※くぞかし、一通は手もとふるへて卷收めぬ、二通も同じく三通四通五六通よりは少し顏の色かはりて見えしが、八、九、十通、十二通、開きては讀みよみては開く、文字は目に入らぬか入りても得よまぬか。

長なる髪をうしろに結びて、古たる衣になえたる帯、窶れたりとも美貌とは誰が目にも許すべし、あはれ果敢なき塵塚の中に運命を持てりとも、汚き垢れは蒙らじと思へる身の、猶何處にか惡魔のひそみて、あやなき物をも思はするよ、いざ雪ふらば降れ風ふかば吹け、我が方寸の海に波騒ぎて沖の釣舟おもひも亂れんか、凪ぎたる空に鴎啼く春日のどかになりなん胸か、櫻町が殿の面影も今は飽くまで胸に浮べん、我が良人が所爲のをさなきも強て隠さじ、百八煩惱自から消えばこそ、殊更に何かは消さん、血も沸かば沸け炎も燃えばもえよとて、微笑を含みて讀みもてゆく、心は大瀧にあたりて濁世の垢を流さんとせし、某の上人がためしにも同じく、戀人が涙の文字は幾筋の瀧の迸りにも似て、失はん心弱き女子ならば。

傍には可愛き兒の寐姿みゆ、膝の上には無情の君よ我れを打捨て給ふかと、殿の御聲あり〳〵聞えて、外面には良人や戻らん更けたる月に霜さむし、たとへば我が良人今此處に戻らせ給ふとも、我れは恥かしさに面あかみて此膝なる文を取かくすべきか、恥づるは心の疚しければなり、何かは隠さん。

殿、今もし此處におはしまして、例の辱けなき御詞の數々、さては恨みに憎みのそひて御聲あらく、さては勿躰なき御命いまを限りとの給ふとも、我れは此眼の動かんものか、此胸の騒がんものか、動くは逢見たき慾よりなり、騒ぐは下に戀しければなり。

女は暫時恍惚として其すゝけたる天井を見上げしが、孤燈の火かげ薄き光を遠く投げて、おぼろなる胸にてり返すやうなるもうら淋しく、四隣に物おと絶えたるに霜夜の犬の長吠すご

く、隙間もる風おともなく身に迫りくる寒さもすさまじ、來し方行く末おもひに忘れて夢路をたどるやうなりしが、何ものぞ佛にその空虚なる胸にひゞきたると覺しく、女子はあたりを見廻して高く笑ひぬ、其身の影を顧みて高く笑ひぬ、殿、我良人、我子、これや何者とて高く笑ひぬ、目の前に散亂れたる文をあげて、やよ殿、今ぞ別れまゐらするなりとて、目元に宿れる露もなく、思ひ切りたる決心の色もなく、微笑の面の手もふるへで、一通二通八九通、殘りなく寸斷に爲し了りて、熾んにもえ立つ炭火の中へ打込みつ打込みつ、からは灰にあとも止めず煙りは空に棚引き消ゆるを、うれしや我執着も遺らざりけるよと打眺むれば、月やもりくる軒ばに風のおと清し。

青空文庫情報

底本：「樋口一葉全集第二巻」新世社
1941（昭和16）年7月18日発行
1942（昭和17）年4月10日再版
底本の親本：「校訂一葉全集」博文館
1897（明治30）年1月9日発行
1897（明治30）年6月再版
初出：「毎日新聞」
1895（明治28）年4月3、5日
※送りがな、振りがな、漢字の使い方の不統一は、底本通りです。
入力：万波通彦
校正：岡村和彦
2014年11月14日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

軒もる月

樋口一葉

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/